

日本人の異文化受容態度にみられる傾向 —— 一地方都市での年代別・国別態度調査より ——

安 達 理 恵

1、研究の目的

日本における外国人の数は年々増え続け、法務省(2007)によると、2006年度末で外国人登録者数は過去最高をさらに更新し208万5千人(総人口の1.63%)となった。また同時に、外国人と日本人との間に生まれる子どもも増加傾向にあり、今後ますます国内において異文化の人々との接触の機会は増えることが予想される。日本における異文化接触研究は、そういった意味からもより重要性を増していると言え、最近では国内および国外の様々な人々を対象に、研究方法も多岐に渡って活発に行われている。

ただこれまでの研究の概観をみると、日本人が外国へ行った際の現地文化への、もしくは来日外国人の日本文化への異文化適応研究が多い特徴がある。国内の一般的な人々も異文化接触に日常的に遭遇する機会が増えている近年は、摩擦によって引き起こされる社会問題もしばしば耳にするようになってきている。その一方、日本は未だ単一民族国家との信念を持つ人も多く、異質なもの⁽¹⁾に対して十分な態勢が備わっているとは言い難い。多文化社会に向かいつつある現在、日本人の異文化に対する受け入れ態度のあり方について考察することは一層重要になると考えられる。

この小論では、一地方都市を中心に⁽²⁾日本人の在日外国人に対する態度や意識を、特に年代と相手の外国人の出身国にみられる傾向を実証的に調査することで、多文化共生時代におけるホスト社会の課題をあぶり出し、多数派側という立場に安住するのではなく、多数派側に対しても文化変容

の必要性を提示することを目指している。対象者を日本人と限定した上で外国人に対する態度を調査することは、文化本質主義に陥ってしまう恐れも否定できないが、筆者は日本人性について決して静的なものではなく、今後動的に変化すべき対象とみなしており、本研究も異文化の人々との新たな関係性を模索するための原資料とすることを目的としている。

なお本調査は、一地域でデータを収集しているため、厳密には地域的偏りがあることは否めず、パイロットスタディ的研究と言えなくもないが、今回は、安達（2006）において日本人の異文化受容態度とその影響要因を調査した結果を基に、以下のような観点から分析を行おうとするものである。一つには、先回の分析では異文化受容態度を集約した「交流親密意識」には年代による統計的有意差はないという結果になったが、異文化受容態度の下位の各項目ごとに詳細に検討してみようというものである。二つ目には、異文化受容態度のうち外国人の出身国ごとに調査・分析した2項目を、今回は年代も加えて改めて考察しようというものである。さらにこの二点についてインタビューによる質的分析も含めて考察することで、今後の研究において年代別分析の意義と、意義があるとすればそこから見出される異文化理解教育への示唆についても検討する。

2、研究の背景—異文化受容態度について

異文化接触に関する従来の研究では、異文化からの滞在・来訪者（sojourner）がホスト社会を来訪した際の適応状態を扱うものが多かった。この場合の「異文化適応」は、Kim（1989, p. 275-276）では同化や異文化変容³⁾、文化的統合も含めた幅広い意味を含んでいるものの、江渕（1997, p. 65-67）では「“ゲスト”（移民や在留民）の側における“ホスト”（受入れ国の支配的集団）の文化に対する自己調整過程」と定義しているように、研究の対象はあくまで移動側となる。

これに対し、研究の対象としてホスト側（多数派）に焦点を当てるのが「異文化受容」である。移動側は一方的に対応の変容を求められやすいのに

対し、ホスト側には変容を求められることがほとんどない。したがってこれまでは研究対象の主体となることもほとんどなかった。しかし、異文化接触では本来、多数派社会にある人々の態度と少数派の人々の態度の両方が関係し、その影響力の大小はあっても双方の態度が影響を及ぼし合うと言える。つまり、社会において起こりうる異文化間の摩擦を避けるには、ホスト側・移動側双方の相手に対する理解・尊重の姿勢が必要と言える。なお石井他（1997, p. 214）では *acculturation* の訳語として異文化受容を提示し、「異文化を持つ人々が、継続的、直接的に接触した結果、一方あるいは双方の本来の文化の型に変化が起ること」としており、文化変容の意味として使われている。しかし、小論では、「異文化受容」をホスト側（多数派）の異文化に対する対応と限定し、「多数派となる受け入れ側が、異文化からの来訪者に対して、どのような態度を取るべきかに焦点を当て」（安達, 2006）るものである。

ホスト側（この場合日本人）の異文化の受け入れ態度に関する実証的な学術研究は、筆者の知る範囲では、塘（1999）など一部を除きほとんどない。しかし日本人の異文化の人に対するイメージ調査はこれまでもいくつか行われている。日本人の異文化の人々に対する態度に関して、例えば小坂井（1996, p. 77-79）では、（異文化の）情報やモノは歓迎するが、それらを持ち込む人間自体は実は拒否するという現象があるとし、外国人の受け入れについても、西洋人と非欧米人には違いが見られることを指摘している。相手の国による態度の違いについては、古いものでは経済企画庁（1993, p. 75）の昭和63年当時の調査によると「外国人と親しく交際することを考えた場合、イメージとして思い浮かべる国」は、アメリカ84.8%、中国41.9%、イギリス36.9%、フランス24.4%の順になっていた。安達（2001）においては、高校生に外国語や各国に対する関心度を調査しており、その結果、外国についての関心度は、英語圏またはヨーロッパ圏は高いものの、それと比べるとアジア圏への意識が低いことが示されていた。また関口（2000）では、外国人の好悪感を調査した結果、アメリカ人をトッ

ブとする欧米上位グループとイラン人・韓国朝鮮人等の下位グループの二極化が固定化される傾向にあることを示している。ホスト社会において滞在・来訪者に対して流布するイメージは、ステレオタイプや偏見に繋がりやすい。ステレオタイプや偏見は、異文化接触の障害となりやすい心理現象であり、ホスト側の人々が抱くステレオタイプや偏見によっては、異文化接触時の態度に影響を与え、摩擦も起こりやすくなる。もちろん、滞在者や来訪者がステレオタイプや偏見を持つこともあるが、移動した直後は、いかにホスト社会に適応していくかがまず念頭にあり、また、自分の方が相手の文化に合わせるべきと認識している。

この他、横田（1999, p. 14）においては、留学生が日本人から受ける援助に対して否定的な感情を抱く場合について検討し、援助者との信頼関係に左右されるという結果から、交流には、留学生と援助する側の日本人の相互の関係が重要であることを示唆している。異文化接触においては、従来の移動側の適応態度だけでなく、ホスト側の態度も大きく影響することが注視されつつある、と言えよう。

また前述した塘（1999）では、小学中学年から中学生を対象に子どもの異文化受容態度を調査し、子どもの発達の年齢によって態度が異なることを見出しているが、実証的に各年代を網羅して調査した研究はこれまでのところ見当たらない。同様に相手の外国人の出身国別の好感度調査や前節で述べたようなイメージ調査の類は多いものの、やはり実証的な方法で分析を行っているものは筆者の調べた範囲ではない。この小論は、日本人のホスト側としての態度に焦点を当てて今後のホスト社会のあり様を考察していく基軸とするものである。

3、研究の方法

3-1 調査対象者と調査方法について

2001-2002年に愛知県の地方都市において、質問紙法および面接法を用いて調査を行った。面接法も取り入れたのは、量的データ分析のみによる

単純な表面的解釈に陥るのを防ぎ、見落とされがちな心理状態、内面的意識も分析に加えるためである。質問紙法では、まず筆者の知人の小学校教師および大学講師に、各々小学5年生⁽⁴⁾69人、大学生89人(大学は近郊の市に所在)を対象にアンケートの実施を依頼した。回収率はいずれも授業時間を割いて行っていることから100%である。

さらに同じ小学校の対象者年齢に近い小学生4・6年生22人、大人75人に面談してアンケートへの記入を依頼した後にインタビューを行った。なお大人については、大学生となる若年層⁽⁵⁾より上の3つの世代を成人層、高年層、老年層とし、年齢層の違いを見るために各20人前後を目標にデータ収集を試みたが、協力を得ることができた対象者の数にはばらつきがあった。またインタビューは、相手から許しが得られかつ時間もある場合にのみ依頼したので、75人中実施できたのは45人であった。インタビューでは、アンケートについて考えたことや、外国人に対して気になること、考えること、また小学生では学校のAL Tなど今まで接触したことのある外国人に対しての印象など、話しを引き出すような問いかけをしながらメモを取った。その後、当日または遅くとも2～3日以内にはノートに書き起こし分析を試みることにした。

以上のアンケート調査対象者255名(内インタビュー計67名)に加え、2004年には、筆者が小学校と同一市内の大学で講師の仕事を得たことから新たに大学生61人にも質問紙調査を行った。これを加えた総計316名に対し、異文化受容態度の①年代別の傾向と②相手の外国人の出身国別にみられる特徴に焦点を当て分析する。なお、統計ソフトはSPSS(ver.10)とJavaScript-STAR⁽⁶⁾を使用した。

3-2 異文化受容態度の測定方法について

異文化受容態度について、安達(2006)では「相手の立場を尊重し、より理解に努め、双方が社会的に等しい立場で関わろうとする共感意識を持つ態度」と定義している。この測定方法については、箕浦(1991, p. 225)の

以下のアメリカ同化深度を参考にした。

- I 日本人とアメリカ人の対人関係の持ち方が違うという認知がないタイプ
- II アメリカ人日本人との行動は異なるという認知はあるが、アメリカ人のようには振舞えないか、振舞おうとしないタイプ
- III 認知・行動面はアメリカ的だが、感情の動きは日本的であるタイプ
- IV 認知・行動面はアメリカ的だが、心情面はどちらなのか未分化なタイプ
- V 認知・行動・感情すべての面でアメリカ的なタイプ

小論の対象とするものは異文化受容であり、箕浦のVのタイプのように完全に異文化に同化するという状況はあり得ない。そこで、共感意識を持つ態度を最大とする、以下のような5段階の回答基準を設定した。

- 1：日本人と外国人では異なるという認知がないか（子どもの場合のみ）、異なるという認知があるので、外国人とは関わろうとしないタイプ
- 2：外国人は、日本人とは考え方や価値観が異なるという認知があり、日本にいる以上、できるだけ日本に合わせるべきと考えるタイプ
- 3：外国人は、日本人とは考え方や価値観が異なるという認知があり、合わせられないという面もあることは認めるものの、感情的に受け入れがたい面があるので、親しくしようとはせず、傍観者的態度になるタイプ
- 4：外国人は、日本人とは考え方や価値観が異なるという認知があり、感情的にも受け入れる気持ちがあるので、親しくしようとする姿勢のあるタイプ
- 5：外国人は、日本人とは考え方や価値観が異なるという面を評価し、感情的にもそういった違いを肯定的に捉えているため、外国人に自ら積極的に関わり、理解し合おうとする姿勢のあるタイプ

質問項目には具体的かつ実際の異文化接触状況を考え、さらに相手の行動に対する評価の場面による違い（個人・集団）にも配慮して、表1のような7場面を設定した。それに対する回答には、上記基準に基づいた異

表－１：異文化受容態度の7場面の調査項目

7場面の調査項目	
項目(1)	あなたのすぐ近所に外国人が引っ越してきて、あなたのところに「ワカラナイ、オオイネ。オシエテクダサイ。」とあいさつに来ました。どのようなつきあいを望みますか。
項目(2)	日本に滞在する外国人の数が増えている現状についてどう思いますか。
項目(3)	あなたの町では、決められた組の数軒ができるだけ協力して、近所の公園の清掃をすることになっています。ところが、あなたの近所の外国人はいつも参加しないので、近隣の人達の中には、その外国人の悪口を言う人もいます。あなたはどう思いますか。
項目(4)	今年は町起こしのイベントを企画することになり、組長のあなたは、近所の外国人にアイデアについての意見を聞いたら、「私にはむづかしいから考えられません。」と言います。これについてどう思いますか。
項目(5)	あなたは、知り合いになった外国人に、「日本人は子どもを甘やかしすぎている。」と批判されました。これについてどう思いますか。
項目(6)	1 あなたの近所のアメリカ人は日本に滞在して1年以上になるのに、日本語をほとんど話そうとしません。これについてどう思いますか。
	2 日本語をほとんど話そうとしない中国人について
	3 日本語をほとんど話そうとしないイラン人について
項目(7)	1 あなたの近所のアメリカ人は、あなたの町で決められたゴミの分別方法を教えたはずなのに守りません。これについてどう思いますか。(小学生の場合：花の水やり当番を守らない〇〇人について、以下同様)
	2 ゴミの分別方法を守らない中国人について
	3 ゴミの分別方法を守らないイラン人について

文化受容態度の選択肢を設けた。例えば項目(1)では、①外国人とは付き合いたくない、②あまり付き合いたくはないが、日本の習慣に合わないこと

があれば教える、③いろいろ教えてはあげようと思うが、面倒はいやなので深い付き合いは避けたい、④日本の習慣に合わないこともあるだろうからできる範囲で話を聞いてあげようと思う、⑤自分も相手の文化や習慣が知りたいと思うのでできるだけ親しくなりたい、から選択するようになっている⁽⁷⁾。なお項目(6)と(7)はそれぞれ、相手の外国人をアメリカ人、中国人、イラン人⁽⁸⁾に分けて尋ねていることから、質問は計11項目となる。

4、量的データ分析の結果

4-1 異文化受容態度の年代別の調査

安達(2006)では、この11項目の異文化受容態度には多面性が見られたため、全項目から主成分分析により集約した第1成分の「交流親密意識」に対して年代による分析を行ったところ、統計的有意差はみられない結果となった。

今回は、項目毎に年代別を水準とする分散分析を行うことで詳細に検討した。その結果、項目(2)の在日外国人の増加についての意識 ($F(4, 311) = 2.54, p < .05$) と項目(5)の外国人からの養育に関する意見への態度 ($F(4, 311) = 3.42, p < .01$) において有意な差がみられた。しかし、その後の多重比較では大きな差がみられたものはなかった。これは年代により人数のばらつきが大きいことが原因と考えられる⁽⁹⁾。そこで、以下では、有意な差がみられたこの2項目について、データ表示により年代別にみられる特徴を再考する。

4-1-1 在日外国人の増加について

在日外国人の増加をどのように考えているかについては、他の質問項目と異なり、異文化の人に対する直接的な態度というより社会的な一般意識を表すと考えられる。安達(2001)では、高校生を対象に在日外国人が増加することに対する意識調査を行っているが、その結果と同じく、年代別のクロス表(表2参照)をみると、全体では「外国人の増加に賛成」が26.3%、

表－２：在日外国人受け入れ意識の年代別クロス表

年代 \ 態度	1:外国人増加絶対反対	2:あまり好ましくない	3:制限して現状維持	4:増えることに賛成	5:より積極的受け入れ	合計人数
小学生	1 1.1%	10 11.0%	27 29.7%	33 36.3%	20 22.0%	91
若年層	2 1.4%	11 8.0%	50 36.2%	35 25.4%	40 29.0%	138
成人層	0 0.0%	5 16.1%	14 45.2%	7 22.6%	5 16.1%	31
高年層	0 0.0%	4 10.5%	20 52.6%	6 15.8%	8 21.1%	38
老年層	0 0.0%	5 27.8%	9 50.0%	2 11.1%	2 11.1%	18
合計 人数 比率	3 0.9%	35 11.1%	120 38.0%	83 26.3%	75 23.7%	316

表－３：養育に関する外国人の意見への対応の年代別クロス表

年代 \ 態度	1:反論・会話やめる	2:日本人の良い面強調	3:同意も反論もしない	4:相づちを打ちながら会話続ける	5:感謝し相手にも尋ねる	合計人数
小学生	9 9.89%	16 17.6%	28 30.8%	9 9.9%	29 31.9%	91
若年層	5 3.62%	22 15.9%	37 26.8%	45 32.6%	29 21.0%	138
成人層	0 0.0%	1 3.2%	8 25.8%	12 38.7%	10 32.3%	31
高年層	0 0.0%	4 10.5%	9 23.7%	7 18.4%	18 47.4%	38
老年層	0 0.0%	4 22.2%	5 27.8%	6 33.3%	3 16.7%	18
合計 人数 比率	14 4.4%	47 14.9%	87 27.5%	79 25%	89 28.2%	316

注) 表2, 3の各セルの上段は人数、下段は比率を表す。

「より積極的に受け入れ」が23.7%と、肯定的な考えが計50%となり、「絶対反対」と「好ましくない」の否定的考えの計12%を大きく上回っていた。年代ごとの特徴としては、若年層以上では「現状維持」が最も多くなっているが、小学生では「増えることに賛成」が最も多い。一方、老年層では唯一否定的な考えが肯定的な考えより多くなっている。しかし年齢が高くなると賛成が少なくなる傾向があるという結果から、一概に年長者は外国人受け入れ意識が低い、とは言い切れない。なぜなら、成人の場合、外国人増加により引き起こされる様々な社会的問題を見聞きしている人々も多いと考えられ、外国人増加のプラス面、マイナス面双方を勘案した上で答えているとも考えられるからである。

4-1-2 養育に関する外国人の意見への対応について

次に、日本人の養育に関して意見をもつ外国人に対する態度についてもクロス表(表3参照)から考察する。全体としては、「会話続ける」が25%、「感謝し相手にも尋ねる」が28.2%と、肯定的な考えがやはり50%を超え、相手の外国人の批判的意見にも耳を傾けようとする肯定的な態度を示す人の割合が多いと考えられた。年代別にみると成人層、高年層のいずれも肯定的な態度の割合が65%を超えており、かつ「反論や会話やめる」とする回答はゼロであった。一方小学生ではこの回答が10%近くあり、若年層でもわずかにあったが、これは自分が子どもという年代にあるため、自分を直接的な批判の対象として感じてしまう場合があるのではないかと推測された。また老年層では「反論や会話やめる」とする回答はゼロであったものの「日本人の良い面強調」がいずれの年代よりも最も多かった。

4-2 異文化受容態度の国別の調査

国別の異文化受容態度を考察する前に、アメリカ、中国、イランの3か国と日本との友好関係に対する意識項目を調べた。これらの国を独立変数とし、友好関係に関する回答を従属変数とする、3水準の被験者内分散分

析を行った結果、各国に対する意識の平均の大小関係は、アメリカ3.65、中国2.85、イラン2.60の順となり、 $F(2, 624) = 158.64$, $p < .01$ と有意であったため、LSD法による多重比較を適用した結果、各国の平均の差はアメリカー中国間は0.79、アメリカーイラン間は1.04、中国ーイラン間は0.25となり、すべて有意 ($MSe = 0.58$, $p < .05$) となった。したがって、友好関係についての認識には相手国により違いがあると結論づけられた。

アンケート項目(6)1-3、(7)1-3では、同じ質問を相手の外国人の出身国別に尋ねたものである。安達(2006)では、国別に異文化受容態度には違いがあるかを検証するため、この2項目について分析した結果、項目(6)では有意差が認められたが、(7)では有意傾向のみであった。そこで今回は、国別の異文化受容態度を年代毎にみた場合どのような特徴があるかに焦点を当て分析を試みた。

4-2-1 日本語を話そうとしない外国人に対して

まず言語に関する異文化受容態度について、年代別(被験者間)と国別(被験者内)で差がみられるか分散分析を行ってみたところ、表4に示すように交互作用が有意であった ($F(8, 614) = 3.07$, $p < .01$)。各要因の単純主効果を分析した結果、年代の単純主効果はどの国でも有意ではなかったが、国の単純主効果はいくつかの年代で有意であった。LSD法による多重比較の結果は、小学生、成人層、老人層において、有意差が見られる結果となった ($MSe = 0.19$, $p < .05$)。但し、老年層は $N = 18$ と少なく、また各年代の人数にはばらつきがあり、等分散性も認められなかった⁽¹⁰⁾ため、結果に疑問が残った。

そこで、年代毎に国別の受容態度の違いを最終的に検証する手段として、フリードマンの順位検定を行った。その結果、小学生では $\chi^2(2, N = 90) = 15.98$, $p < .01$ で、成人層では $\chi^2(2, N = 31) = 9.00$, $p < .05$ となり有意差が見られ、また高年層でも $\chi^2(2, N = 37) = 5.43$, $p < .10$ となり有意傾向が見られたが、老年層では $\chi^2(2, N = 18) = 4.00$ で有意とはならなかつ

表－４：言語に関する年代と国別態度の平均値、標準偏差、分散分析結果

年代 \ 相手の出身国	米	中国	イラン	分散分析結果	自由度	平均平方	F
小学生 (N=90)	3.6 1.22	3.52 1.24	3.36 1.14	被験者間要因 年代：A 誤差：S(A)	4 307	1.78 3.84	0.46
若年層 (N=136)	3.30 1.23	3.23 1.19	3.18 1.16				
成人層 (N=31)	3.55 1.04	3.39 1.04	3.29 0.96	被験者内要因 国：B 交互作用：A×B 誤差：B×S(A)	2 8 614	0.88 0.59 0.19	4.57* 3.07**
高年層 (N=37)	3.46 1.24	3.38 1.19	3.24 1.15				
老年層 (N=18)	3.17 1.21	3.00 1.11	3.39 1.06	全体	935		

表－５：ウィルコクソンによる多重比較結果

年代群ごとの多重比較	米：中	米：イラン	中国：イラン
小学生	=	>**	>*
成人層	=	>+	=

注) 表中の二段のセルの上段は平均、下段は標準偏差を表す。(表－６も同様)
+p<.10, *p<.05, **p<.01

た。有意差のあった小学生と成人層の二世帯において多重比較のため、3カ国のデータからウィルコクソンの符号付順位検定を行った結果、小学生においては、アメリカーイラン間は $Z=3.30$, $p<.003$ 、中国ーイラン間は $Z=2.64$, $p<.017$ で有意差が見られ、成人層の世代では、アメリカーイラン間において $Z=2.33$, $p<.033$ で有意傾向のみ⁽¹⁾が見られた。

このように言語に関しては、小学生では、相手の外国人の出身国（アメリカとイラン間および中国とイラン間）により態度に違いがあると認められた。この理由としては、小学生は大人に比べ自分の考えを率直に表わしやすい傾向があるからではないかと考えられる。またアメリカと中国間では差がなかった原因は、明確ではないが、対象となった地域の小学校には、

近年国際理解教育の一環として中国人や欧米系外国人が訪問することがあり、アメリカおよび中国出身者には比較的親しみを感じていると推察され、それが違いを生まなかった一因ではないかと考えられた。

しかし、成人層は、多重比較ではアメリカとイランで有意傾向のみであったため明確な差があるとは断定できず、また老年層は、分散分析の結果と異なりフリードマンの順位検定では有意差はなく、調査対象者数も少ないことから差は認められなかった。このことから、小学生以外では相手の外国人の出身国による態度に明確な違いは認められないという結果が示唆された。

4-2-2 ゴミの分別方法を守らない外国人に対して

次に、項目(7)1-3に対しても同様に、年代別と国別の2要因の分散分析を行った結果、表6に示すように、交互作用は有意とはならず($F(8, 616) = 0.92$)、年代と国の各要因の単純主効果も、いずれも有意差はみられなかった。また、成人層の世代では、国別には全く差がみられず、

表-6：ごみ出しに関する年代と国別態度の平均値、標準偏差および分散分析結果

年代 \ 相手の出身国	米	中国	イラン	分散分析結果	自由度	平均平方	F
小学生 (N=91)	3.26 1.01	3.16 1.04	3.22 1.01	被験者間要因 年代：A 誤差：S(A)	4 308	6.52 3.39	1.92
若年層 (N=135)	3.21 1.17	3.19 1.16	3.07 1.18				
成人層 (N=31)	2.81 1.06	2.81 1.06	2.81 1.06	被験者内要因 国：B 交互作用：A×B 誤差：B×S(A)	2 8 616	0.03 0.15 0.16	0.20 0.92
高年層 (N=38)	3.39 1.06	3.39 1.06	3.39 1.06				
老年層 (N=18)	3.33 1.15	3.33 1.11	3.5 1.17	全体	938		

かつ他の世代に比べ平均値が最も低いという特徴があった。逆に、老年層では、他の異文化受容項目と異なり、平均値が他の世代に比べ高くなっていた。これは、ゴミ分別は高齢者自身にとっても負担が大きいものと推察され、外国人に対しても寛容になるためではないか、と推測された。以上から、ゴミの分別方法という社会的なルールに関しては、どの世代においても相手の出身国によって態度に違いはないと考えられる。

項目(6)の言語と項目(7)のゴミの分別で異なる結果となったのは、言語のような個人的な問題の場合は、相手の出身国により受け止め方が年齢層によってやや異なる傾向が伺えるが、その一方、社会的なルールに関しては、相手の出身国に関わらずより厳格に対等に接しようとする意識が強く働くのではないかと考えられた。また、アメリカ、中国、イランの3か国と日本との友好関係についての認識は国により差がみられたものの、それが、個人の対人関係（異文化受容態度）にはあまり大きな影響を与えていないと考えられた。

5、考察

5-1 異文化受容態度の年代別にみられる特徴

まず、異文化受容態度の年代ごとにみられる特徴としては、老年層では受容態度が比較的低い傾向にあると考えられた。アンケート項目(1)、(2)、(3)、(6)-1、(6)-2においては、異文化受容態度の平均値は、他の年代に比べ老年層が最も低くなっていた。老年層はN=18と最も少ないため断定はできないが、今後、人数を増やした上で、やはり低い傾向がみられるかどうか、より詳しい検証が必要と考えられる。

このような傾向となった原因について、インタビューによる調査データも加えて考察すると、地理的また歴史的特性から同質性が比較的高かった日本では、外国人と接触する機会が少なく社会的受け入れ態勢が十分に育まれて来なかった土壤があるのではないかと考えられた。それは、例えば以下のようなインタビュー結果からも伺える。

「基本的に日本はずっと島国であったので、異国の人に不慣れな所があるのだと思う。特に年配の世代が外国人に構えてしまうのは当然だと思う。」(40代男性)

「日本が島国ということもあり、日本人は外国の人とコミュニケーションを取ることが下手であったし、世界から孤立化している時代もあった。けれどこれからは、文化、経済、さまざまな面でより開かれていくべき。」(60代男性)

また、一般に老年層では、海外に行く機会が多い人もいるものの、その多くがパック旅行のためか、現地の人々とも十分な接触のないまま帰国するため、個人的な異文化接触までには至らず、見た目の印象だけで現地の人々を判断しまうのではないかと考えられた。これについては、次のような例からも伺える。

「外国人とは滅多に会う機会はないなあ。海外旅行へ行っても、パック旅行だから。自由行動でも、買い物は、日本語の話せる人のいる店に行く。この年になって、今更外国人の友だちを作ろうとも思わないよ。」(60代男性)

「海外旅行は、何度か行ったが、ほとんどパック旅行なので、あまり現地の人と接することは少ない。やはり、ヨーロッパの国々は、古き良き文化があり、町並みも美しく、建物の概観もきれい。人々も特に南ヨーロッパの国々の人は全体的にのんびりした印象がある。アメリカは、歴史があまりないせいか、地方は国土が広くのんびりした感じもあったが、都会はごみごみしていてあまり良い印象がない。人種もさまざま、ごみごみした感じがあった。東南アジアは、こわい印象がある。マカオでは、ずっとスリが後をつけてきた。それに中国人、香港人は、あくせく働いていた。」(60代女性)

このように、海外へ行くことはあっても個人的な異文化接触はないと、相手に対して十分理解をしないまま、表面的なイメージにより判断しやすいと予測された。但し、「郷に入れば郷に従え」の諺通り、日本に来た外

国人も日本のしきたりに合うように行動すべきだと考える。」(70代男性)と外国人に対しては同化一辺倒を求める考えを持つ人がいる一方で、次の60代男性の例に見られるように、娘が外国人と結婚するという個人的異文化接触経験を通して、外国人に対する受け入れ姿勢が高まったと思われるケースもあり、個人差は大きいと考えられる。

「日本も他の国のように、外国人が増えていくのは、時代の流れで仕方ないことだと思う。(娘が住む)フランスでは、日本に比べ、人種差別がないことが非常に印象的であった。孫の小学校の入学式でも、いろいろな人種の母親達と娘は自然に話していた。アフリカに青年海外協力隊で行ってきた知人の息子さんが、膚の黒い人と結婚すると言い出し、知人が反対したが、これからの時代はそんなことを言っていないといけないと思う。」(60代男性)

5-2 異文化受容態度の国別にみられる特徴

相手の外国人の出身国別にみられる特徴としては、言語のような個人的問題に関するものは、特に小学生では国によって明確な差がみられた。一方、社会的なルールに関しては、年代を問わず相手の出身国に関係なく接しようとする意識が働くと考えられた。一方、日本と外国の国家間の友好関係意識については明確な差があったが、それは異文化受容態度に大きな影響を与えてはいないと考えられた。

安達(2006, p.126-129)のインタビューに基づく質的データによる分析では外国人に対して、見た目やメディア等からの情報、人からのうわさにより、イメージ・偏見が形成されると考えられた。相手の外国人の出身国または肌の色などの表層的なもので相手を判断する傾向は、次のような事例にも見られる。

「白人の外国人で、特に日本語を話す人だと、つい親しみを感じて、気を許してしまう。以前、「留学に来ているけどお金がないのでお願いします。」と言われ、それほど高額ではないが、絵を買わされてしまっ

た。後で似たような手口で絵を売っている外国人がいたと聞いた。黒人の人だったら対応はしなかった、と思う。偏見はいけない、と思うのだけ。」(60代女性)

「我々の年代だと膚の色が違うとちょっと気になってしまう。白人だとそれほど違和感はない。」(60代女性)

「ボランティア活動で、数年前、ホームステイを引き受けた時、きちんとした教育を受け、ある程度の社会的立場にあっても東南アジア出身の外国人には、やや見下げた対応をする人達がいた。」(50代女性)

しかしながら、小学生以外では、統計的には明確な国別の有意差は見られなかったことからすると、特に大人の場合以下の例にみられるように、実際の行動では偏見を持たない対応をしようとする判断が働くか、もしくは(感情はさておき)そのようにすべきだという意識が強くなるのではないかと推測された。

「アメリカ人は、自己主張が強く、わがままな人が多い気がした。イタリア人はフレンドリーだった。東南アジアなどから来る外国人が日本に来るのは、生活のためだから仕方がないと思う反面、日本人の仕事が減るのではないかと心配な気もする。基本的に外国人、日本人という区別はなく、みな地球人という気持ちでいる。」(40代男性)

「小学校の時、朝鮮人の多く住む部落があり、その出身者は、学校で差別を受けていた。友達になりたかったが、仲良くすると、自分もいじめにあったりして、なかなか親しくなれなかった。出身で人を差別するのはおかしい。」(50代女性)

したがって、今後、大人について正確な分析をするには、量的調査法のみならずより質的な方法も重視する必要があるのではないかと考えられる。

6、結語と今後の課題

この小論では、日本における異文化に対する受容態度・意識を、実証的に年代別、国別観点から探ることで、ホスト側の異文化受容態度を一考す

ることを目標とした。年代別データ数にはばらつきがあり、またデータのサンプリングが一地域にすぎない点では課題があるものの、ホスト社会側の異文化受容態度について、次のような示唆が得られたと考えられる。

まず、年代別分析において老年層は異文化受容態度が他の年代に比べ低い傾向が示されたことは、年代別に差がないとは断定できないことを意味する。今後、人数を増やした上でやはり同様の傾向が見られるのか、さらには老年層にみられた個人的な異文化接触がないことが低い傾向につながっているのか、より詳しい検証が必要と考えられる。

また相手の外国人の出身国別分析では、言語のような個人的問題に関して、小学生では国により態度に違いがあると示されたことから、どのような状況において違いが生まれるのか、小学生を中心に分析することでより明確になると考えられる。異文化受容態度に年代別や国別に違いがあるとすればそれはどのような場合なのかについて、本調査地域以外でも調査を行い、さらにより多様な国の外国人も対象とすることで、精緻かつ包括的な検証をしていくことが今後必要であろう。

滞在者や外国人労働者が、その国を来訪した根源は、ホスト社会側にも由来する。例えば外国人労働者が増加する背景には、経済停滞、若者の3K労働離れ、少子化など、日本社会の多様な要因が存在する。グローバル化が進む現代において、外国人を排除し、交流を縮小する方向に進めようとすることは不可能であり、基本的には需要があるから供給も生まれるのである。このような背景を鑑みれば、受け入れ側にも当然、相互理解への努力がなされて然るべきであろう。

このような視点からすれば、異文化受容を実証的に把握しようとする本稿のような研究は、多文化共生時代を迎えつつある日本社会の象徴として意義深いものとなろう。本研究はまだ十分な妥当性があるとは言えないが、代替的な一般化の可能性はあると考えられる。多文化化の進行に伴い、異文化間教育に携わる者だけでなく一般的な人々も、ホスト社会という安住状態から脱却し異文化間的視点を持つことが求められる。高齢化社会に

伴い看護や介護分野での労働者の不足により、EPA（経済連携協定）に基づいた外国人受け入れも始まる。国内における異文化間接触は、特定の地域、特定の人々の間に限定されない、遍在するものとなろう。学校のみならず、高齢者も対象とした生涯教育における異文化間教育の重要性を喚起するためにも、日本人の異文化受容における課題を捉え、マジョリティとしての態度の変容と異文化の人々との関係性構築の必要性を社会に照射していきたい。

〈謝辞〉本小論に貴重なご助言を下さった、名古屋大学木下徹先生と名古屋外国語大学宇治谷映子先生に深く感謝致します。

〈注〉

- (1) ここで言う“異質なもの”とは、異文化に限らず、同一文化内にあっても価値観、嗜好などの違いにより異質さを感じるものを指す。したがって“十分な態勢”も、摩擦を引き起こさないような様々な対応を取ることを指す。
- (2) この都市は、名古屋市の近郊にベッドタウンとして位置していることから、近年人口が急速に増えて平成6年に市になった比較的新しい町である。国土地理協会（2004）によると、平成15年から16年までの1年間の人口増加率では、2.72%となっており、全国平均の0.11%と比較すると増加傾向の高い都市と言える。市広報（2008年3月号）によると、2007年12月末現在総人口78,883人に対し、外国人登録者数は1,178人で割合は1.5%である。したがって本調査の対象都市は、全国平均（1.63%）に近いと言える。なお、調査対象を一地方都市のみに絞っている点から表題の“日本人の異文化受容”には語弊があり、本来は全国的に限なく調査すべきであろう。しかし筆者の調査時点での大学院生かつ家庭では義父母と同居する3人の子の母という立場上、公式に調査依頼できるルート、資金、時間もなかったため今後の研究の土台とすべく調査したものである。しかしながら主婦という役回りから培った人脈から多くの方々には調査への協力をお願いできたことについてこの場を借りて感謝したい。
- (3) 異文化適応と異文化変容については、両者を明確に区別することは難しく、両者は重なるとも考えられるが、Kim（2001, p. 12）などでは文化変容

Acculturation は異なる文化を持つ双方の人々に起こる変化であると示唆している。

- (4) 小学生5年生を対象としたのは、塘 (1999, p. 91) は、異文化や偏見に対する態度は高学年において認知領域から発達すると述べており、また箕浦 (1991, p. 248-254) では子供の文化文法体得期は高学年であるとしており、この年齢にはある程度異文化に対する意識の明確化がみられると考えたためである。
- (5) アンケートは、小学生、16-24才、25-39才、40-59才、60才以上の5段階から選択するように設定したが、実際は16-24才の調査対象者には大学生しかいない。16-24才をひとつの区切りとしたのは、子どもではない青年期頃を設定したためである（高校生の調査協力者がいればここに含める予定であったが対象者を探せなかったため）。したがって小論の小学生以外の年代は全て18才以上となる。なお大学生には社会人学生が一部含まれており16-24才以外を選択した人もいる。
- (6) JavaScript-STAR とは、インターネット上のフリーウェアの統計分析ソフトでオリジナルは田中敏先生の提供によるもので、以下のサイトから利用できる（2007年8月現在）。
<http://www.kisnet.or.jp/nappa/software/star/index.htm>
- (7) すべての選択肢内容は安達 (2006) を参照、もしくは筆者まで連絡頂ければ提供する。なお、これらは明確には順序尺度のため厳密には分散分析で分析することはできない。しかし今回は、年代別調査は最終的にはクロス表で分析しており、国別の調査も国ごとに違いを見ることを目的に最終的にはノンパラメトリック検定を採用していること、さらにいずれの調査も質的データを含めて分析することであくまで特徴や傾向を捉えようとしたものであることを断っておく。
- (8) この3カ国を対象とした理由は、世界を文化的に大きく分けたアジア、西洋、イスラムの3文化圏のうち、日本で比較的良好に知られており、国内の在住者数も多いことから選んだ。なお、国別の態度調査はステレオタイプを形成する危険性が全くないとはいえないが、敢えてホスト社会に潜む差別的な意識をあぶり出すことで課題を浮上しようとする戦略的意図によるものである。一般にメディア等の情報にはステレオタイプ形成につながるものがあふれている現状からすれば、この調査でステレオタイプが助長されるとは断定できない。むしろ、この結果を用いてステレオタイプをなくすための教育

の必要性を訴えることができるメリットを優先すべきと判断した。

- (9) 年代別の人数の偏りをみるための $x^2(4, N=316) = 159.54$, $p < .01$ となり、有意となった。
- (10) JavaScript-STAR で $N = 37.51$ (調和平均) と仮定して分析が行われたため。
- (11) ここでの有意水準は、Bonferroni による多重比較の調整を行っている。

〈引用文献〉

法務省 (2007) プレスリリース「平成18年末現在における外国人登録者統計について」平成19年5月

<http://www.moj.go.jp/PRESS/070516-1.pdf> 平成20年2月14日検索

安達理恵 (2001) 「英語および外国や外国人に対する高校生の意識調査」『中部地区英語教育学会紀要 第31号』

安達理恵 (2006) 「日本人の異文化受容態度に関する実証的事例研究—異文化理解教育の方向性を考察する異文化間コミュニケーション研究」名古屋大学大学院国際開発研究科博士論文

石井敏 他編 (1997) 『異文化コミュニケーション・ハンドブック』有斐閣

江淵一公 (1997) 『異文化間教育学序説』九州大学出版会

経済企画庁 (1993) 平成5年版『国民生活白書』大蔵省印刷局

小坂井敏晶 (1996) 『異文化受容のパラドックス』朝日新聞社

関口知子 (2000) 「在日日系ブラジル人の子ども達—異文化間に育つ子ども達のアイデンティティ形成に関する教育人類学的研究」名古屋大学大学院国際開発研究科博士論文

塘利枝子 (1999) 『子どもの異文化受容』ナカニシヤ出版

箕浦康子 (1991) 『子供の異文化体験』(pp. 223-290) 思索社

横田雅弘 (1999) 留学生支援システムの最前線『異文化間教育』第13号 4-18
異文化間教育学会

Kim, Y. Y.(1989) Intercultural adaptation. In Asante, M. K. & Gudykunst, W.B.(Eds.), *Handbook of international and intercultural communication* (pp.275-294). California: Sage.

Kim, Y. Y.(2001) *Becoming intercultural: An integrative theory of communication and cross-cultural adaptation* (pp.11-15). California: Sage.